

010 A-works

architect: arita yoshitaka, director: aizawa kumi, planner: baba masataka, photo: mitsuhashi jun



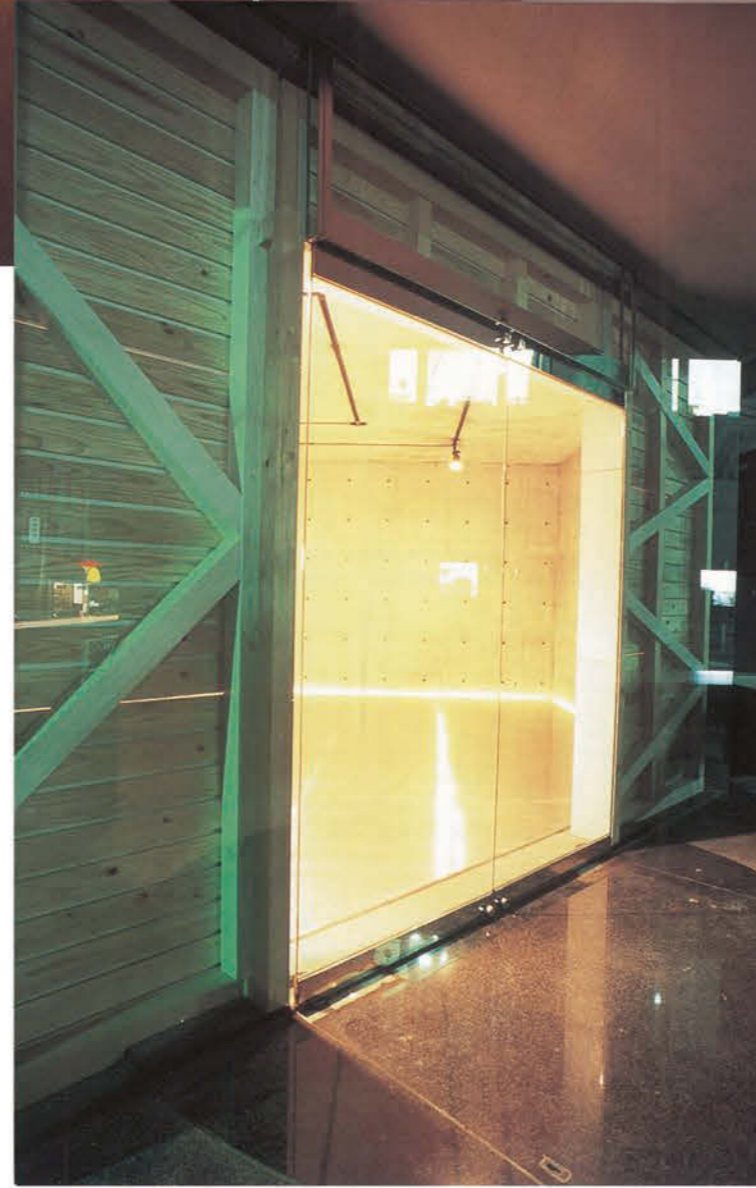
ambience cafe project 中間報告

アンビエンス・カフェをつくらうという話から始まったこのプロジェクトは、その後クライアントの要望によりプログラムとデザインに変更が加えられ第1期工事に入った。基本的には営業は考えないで、内部の打ち合わせに使えたり、スタッフが夜、酒が飲めるようなスペースであればいいということ。そしてそのために夜でも外から見えないようにガラス面を塞いでほしいということが主な要望だった。

「バカやってるよ」というのが褒め言葉になっている会社がクライアントの場合、その内装を設計するにあたっては、僕らもやっぱり良い意味での「バカ」にならなければいけない。これはなかなか難しい。

そしていろいろ作戦をねる。「ガラスをフィルムやロールスクリーンで塞いだら、それは常識的すぎるでしょう」「壁をつくらう」「んー、それも偽のコンクリート打ち放しの壁」「いいねー。コンクリートの型枠の目地から光が漏れてきたりして」「下地はどうする?」「木下地で木摺りなら外から見えてもきれいだし」「じゃあ筋交いがあるね」「筋交いが「B」「D」「I」って文字になっているっていうのはどう?」「おー、サインになっているんですね」

こうして、裏方の造作がファサードに向いて、さらにサインになっている、内側に回ると本物のコンクリート打ち放しの壁が、何故か偽もののコンクリート打ち放し壁に切り替わっていて、そのイミテーションの打ち放し壁の型枠目地から光が漏れているという、ちょっと変わった目隠し壁が出来上がった。

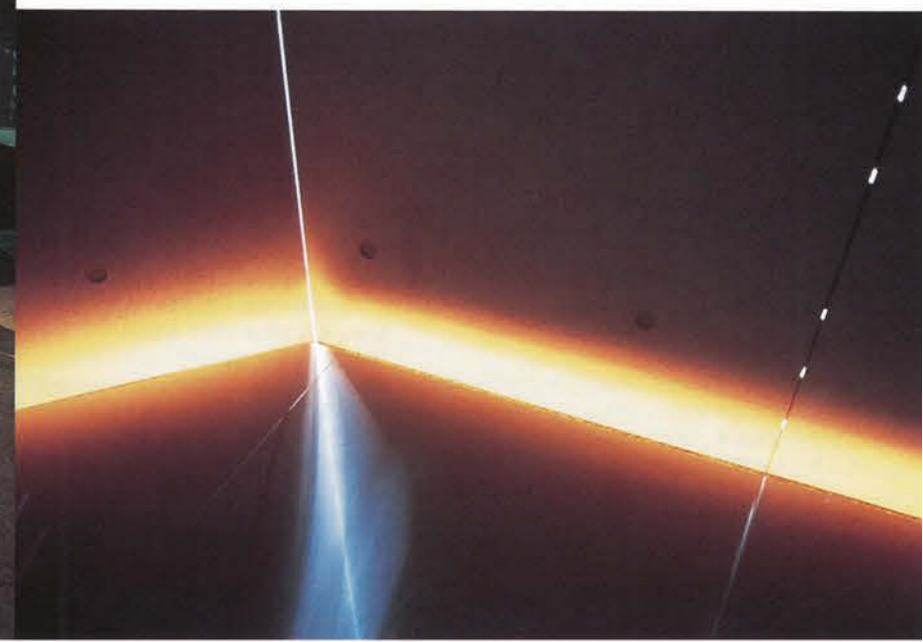


床に関しては、将来的に入れる家具のためにフラットに仕上げたかったのと、光の効果を考えてアルミ板を敷き詰めることにしたが、既存の床の段差を吸収するために、どうしても50ミリほど床を浮かさなければならなかったのと、既存の壁と縁を切って施工したかったとの理由で、床と壁との境目に小さな溝ができることになった。

「カベとユカの間でできてしまったこの溝は、もう埋められないんだろうか……」「いいえ、そんなことはない」ということで、アルミ床の周囲の溝には間接照明が仕込まれた。我々は無事、光明を見いだし溝は埋められた。

こうして出来上がった床と壁を見ながら、第2期工事の打ち合わせをした。「んー、やっぱり営業するカフェバーにしようかなー」とクライアント。

ありふれたことでは満足しない、常にそこにウイットと斬新さを求める人たちがクライアントの、このプロジェクトなのである。



A-works

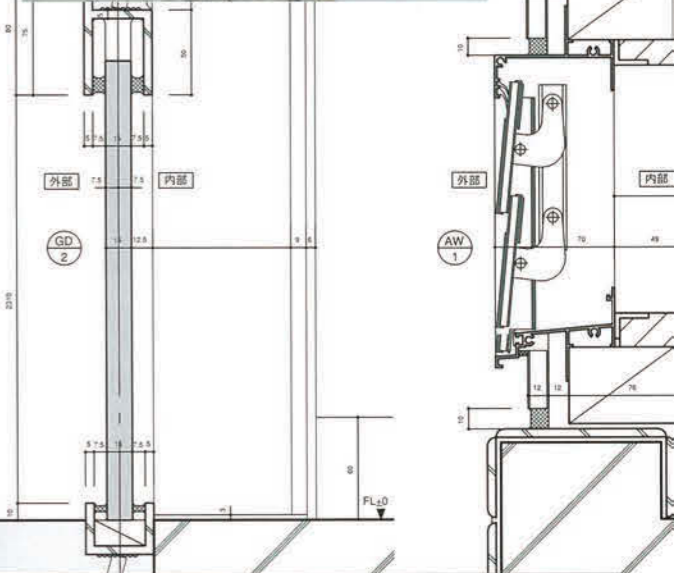
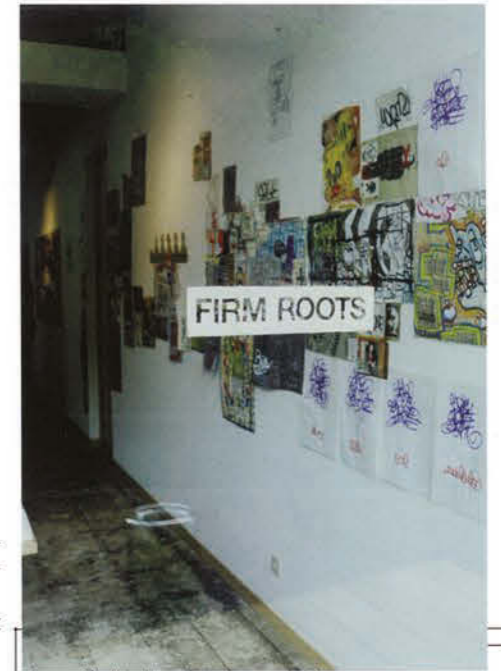
building is editing

都市を編集する作業。
それは、様々な偶然の出来事を紡いで
必然へとつくり変えていく作業でもある。

いくつかのプロジェクトが我々の周りで発生し始め、
それらに様々な役割でかかわりを持つ機会が増えてきている。
企画、設計、デザイン、コーディネーション、出版、力仕事、等々。
そのかかわり方が多様であればあるほど、
それらの組み合わせの可能性も広がっていく。
単独のプロジェクトでは解決できないような問題も
複数のプロジェクトを結び付けることで
劇的に糸口を見出すこともあるし、
思い掛けなくオモシロイ出来事が
驚くほどのスピードをもって展開していくこともある。

wild side meeting vol.1と+atdic vol.1は同じ会場で立ち上がり、
GALLERY・MAは+atdic vol.1の問題を解決し、
trans architecture展とAが結びつき1冊の本になり、
+atdic vol.2がFIRM ROOTSで開催される。

ここに紹介するいくつかのプロジェクトは、
そんな、一連の流れの中にある都市への試行の一部である。



014 A-works FIRM ROOTS

architect: arita yoshitaka, director: aizawa kumi,
planning: baba masataka, photo: KATSU, arita yoshitaka

代官山FIRM ROOTSが完成した。
服飾を中心に書籍等も扱うショップだ。

築30年のビルの1階を解体してできた
トンネル状の空間。
その両端をガラスで塞いでショップをつくった。

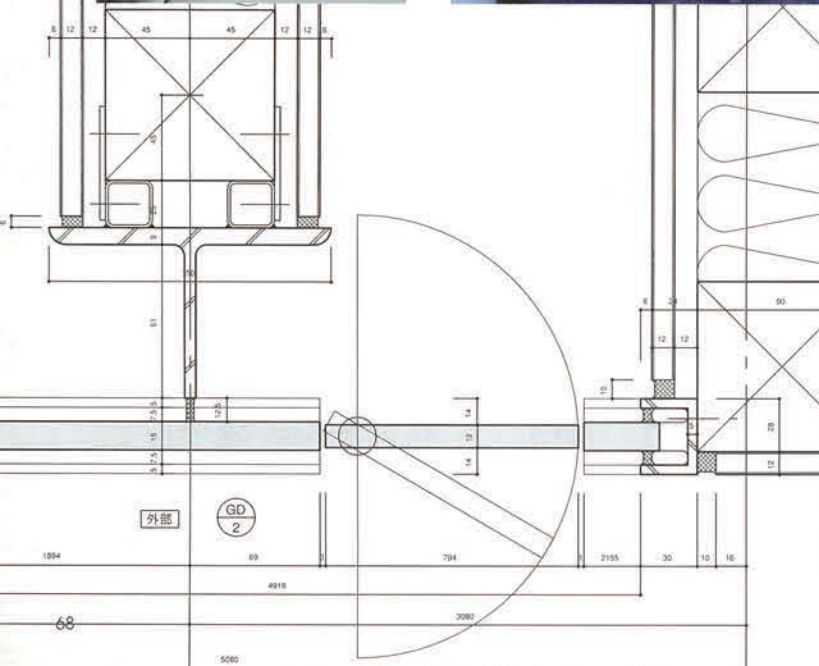
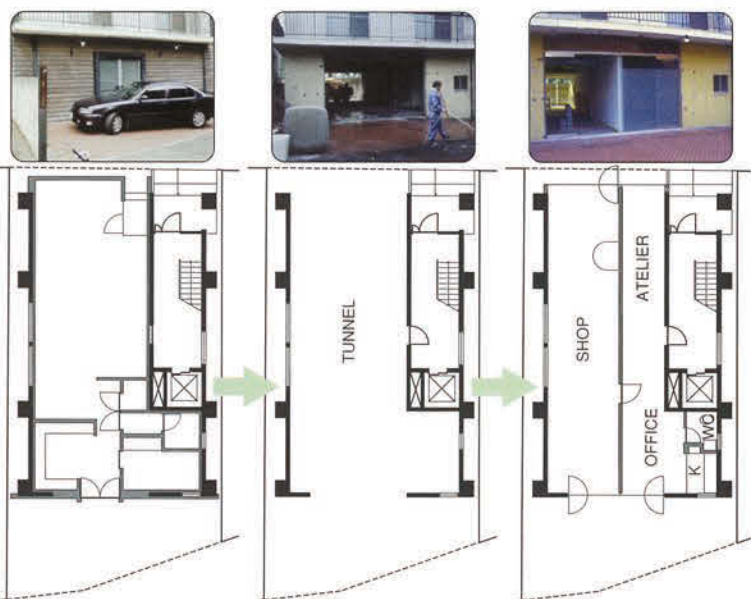
偶然現れた解体後のスケルトンの空間、その状態をそのまま標本にしたような店にする。
それが最初のイメージだった。
時間を重ねた既存部分に対して、新しくつくるものをどう嵌め込んでいくのか、その対比のバランスをコントロールすることで、僕らの表現にしたいと思った。

スケルトンがトンネル状の物件なんて滅多にない。
それも、坂を下った突き当たりにあるトンネルだ。
だからショップになってもこのトンネルは通り抜けられるようにしたかった。



結果的に、内部は床も天井も解体時そのまま。内部を2分割し、音を遮断するために白い壁が1枚挿入された。それだけのシンプルな構成となった。もちろんショップには出入り口が2つあり、こっちの道から入ってあっちの道に出られる。その、通り抜けるトンネル状のプラットフォームに商品が配置される。

FIRM ROOTSはショップとしてだけでなく、様々な情報を発信する場として機能し始めている。



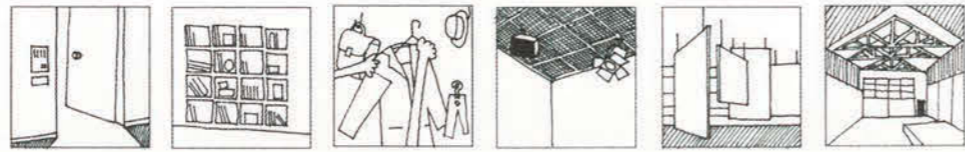
+atdic @ FIRM ROOTS

photo:arita yoshitaka

8月6日、FIRM ROOTSを会場に+atdicが開催された。第1回目のゲストはグラフィティアーティストの渡辺アルト。ショップ内の商品は片付けられ、プラットフォームは落書きのギャラリーになった。仮設のDJブースとバーができ、音楽を聞きながら、ビール片手にアルトのライブペインティングを見たり、座り込んで話をしたり。そんな一晩だけの空間が出来上がった。

FIRM ROOTSはこれからも色々なタイプのイベントの場として使われていくらしい。

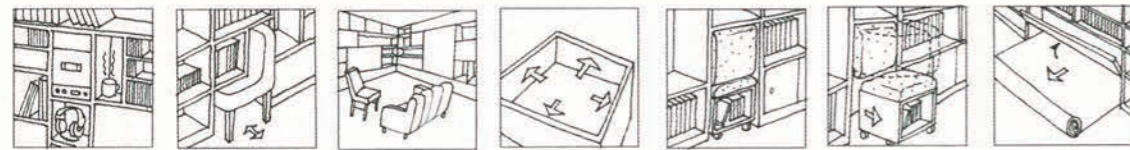




+atdic afterschool talk dictionary

Be good circulation!

継続とは偉大だということを見ている。「dictionary」を見て思う。「dictionary」とは、知る人ぞ知る、もう10年も続いているフリーペーパーだ。時代を生き抜くための手段を集めた辞書、dictionary。気がつけば、そのバックナンバーは90年代の音楽シーンを中心とした人物と活動の、まさに dictionary となっている。それを淡々と出版し続けた桑原茂一氏が、「dictionary」を、人とラジオと空間で立体的に組み立てようとするのが、afterschool talk dictionary (+atdic)。



dictionary → afterschool talk dictionary (+atdic)

「かわりのきかない個人を大切にメディアがあった方がいいか」と思っていたんだ。12年前を振り返りながら、桑原茂一はこう切り出した。「海外のクラブシーンの動きなどを紹介すると同時に、日本でもクラブシーンや複合的なカルチャーが自然発生的に生まれることを期待して始めたのが、「クラブキング」という会社です。そのためには、メディアが必要だった。最初はいろんなメディアに「こんなことやから紹介してくれませんか」と頼んで回っていたけれども、本当にやりたいことを伝えるには、自分たちのメディアを持って表現していかないとダメだと気がついた。こうしてフリーペーパー「dictionary」は生まれたんです。最初のころは「そんな金にもならない仕事をなんでおまえらやってるんだ」とか、揶揄されたんですけどね。だからこそ、自分たちにとって未来をポジティブに捉えられる知恵を満載した辞書が必要だと思っていた。有名無名を問わず表現できる、いろんな声が聞ける、こんなメディアの存在は、これからなにか新しいことをやろうとしていた人々にとって、知恵や勇気になっていたのではと思っています。

このメディアを10年続けてみて、その部分をもっと強く打ち出せるような場が欲しい、この雑誌をこの先10年続けていけるようなリアルな場が欲しい、そう思うようになった。それが、afterschool talk dictionary (+atdic) です。

「クラブキング」では、イベントやクラブの運営をたくさんしてきました。でも、本当にやりたかったクラブのかたちを、なかなか実現できなくなってやめてしまったんです。

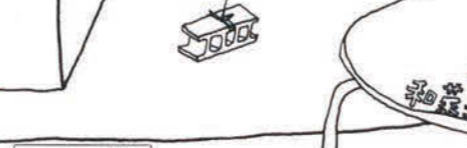
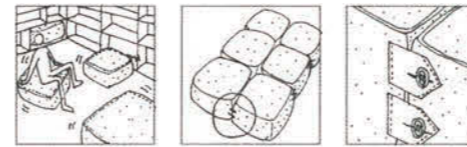
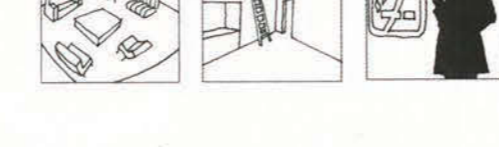
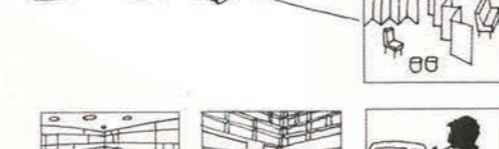
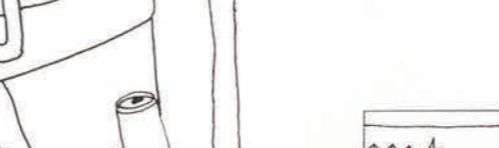
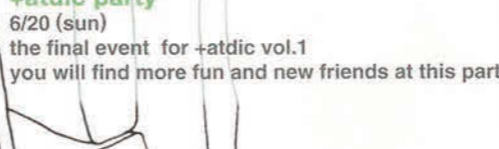
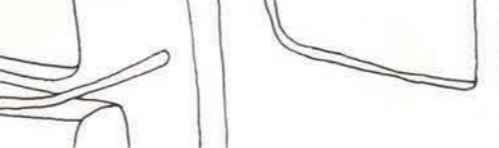
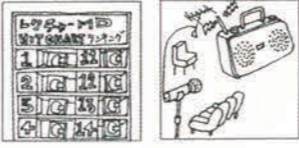
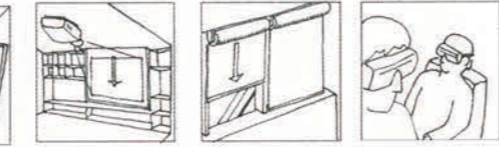
+atdic は、それをクラブという形式ではなく実現しようとしているのかもしれない。従来のたばこの煙やアルコールの匂いや音、そういうものはなくな

るかもしれないけれど、そのかわり、例えば日本茶の香りがして、人と人がコミュニケーションすることによって時間を過ごせる。そこから新しい動きがなにも生まれてくる、そんな場が欲しかった。もし日本の社会が大人の社会として成り立っていれば、クラブという形式も有効だったと思います。でも日本の場合は閉ざされたコミュニティになったり、消費や風俗の方に流されやすい。だから afterschool という言葉をあえて選んでみたんです。学校が終わった開放感と、だからこそ自然に起こる自由な会話。制度の外にある心地よさ。afterschool っていう言葉には、誰しも感じたことのある、少しだけノスタルジックで穏やかな響きがあるんじゃないかと思ったんです。その空気を伝えたかった。

たまたま「dictionary」で呼びかけてサロンをやったんです。何か特定の目的があるわけじゃないんです。「土曜日の3時から集まりませんか?」って、紙面で告知して。例えば、国連大学の裏の青山ブックセンター前の空き地や、代官山の西郷山公園で集まって、みんなでワイワイ話した。有名な芸能人や、クリエイターや、学生やらが自然と集まってきた。屋外に突然できた、ポップ・アップ・サロンのようなものだった。その自由で屈託のない空気がすごくよくて、とても印象に残っていたんです。+atdic は、そんな出来事の延長線上にあると思っています。

その日のナビゲーターによって、形式や雰囲気はきっとバラバラになると思うし、そうなってほしい。来てくれた人が、なんとなく座布団に座って、車座になって、お茶でも飲みながらナビゲーターの話を聞いている。そんな静かな時もあれば、すごくアクティブな、煽られるような過激な時もあるだろう。その場所では色々なことが起こっていいんじゃないかと思っています。参加した人々によって場が形成されてゆく。こう使いたいという人が集まって行けば、その場所が勝手に動き始める。僕はそんな動きの現場に立ち会ってきたい。

この +atdic は、6月の週末に、渋谷space edge で立ち上がる。



A activity → afterschool talk dictionary (+atdic)

このafterschoolが行われる場所と空間計画に A activity が協力することになった。まずは場所探しから。+atdic には、どんな人が集まり、どんなことが起こるのだろうか。どんな仕掛けがあったら楽しいだろうか。そもそも、それはどんな場所にあるのだろうか……。こんなことを空想しながら設計を行うことはとても楽しいことだ。A activity が考える +atdic へのアイデアとイメージのパスル。この場所は、教室、サロン、リビングルーム、ライブラリー、カフェ……。それらどの機能も持ち合わせているけれど、そのどれでもない。そこは +atdic。A activity にも、+atdic に時間をもらえることになった。この場所から「都市」の次の概念/機能/ライフスタイルを構成する新しい言語を発信したい。

dictionary for a 3rd field.

*afterschool talk dictionary (+atdic) の詳細は、フリーペーパー「dictionary」No.0067 (4月15日出版)に掲載されています。

桑原茂一 クワハラモイチ：
選曲家/プロデューサー/株式会社クラブキング代表
1973年より米国のカウンターカルチャー音楽雑誌「ローリングストーン」日本版の創刊から運営を手がけ、77年「スネークマンショー」プロデュース。YMOと共演、同年、「コムデギャルソン」のファッションショー選曲を開始する。
89年にはフリーペーパー「dictionary」を創刊。
96年、渋谷区のコミュニティ放送、渋谷FMにて3時間の帯番組「CLUB RADIO DICTIONARY」を開始。



ダンボールで家具をつくることになったのにはちょっとしたいきさつがある。
+atdicにはイス、テーブル、ディスプレイ台の類がかなりの数必要だった。
それをどこから手配するのか、それも安く、短時間で組み立て解体ができ、イベント後の処分が楽なもの。
なにしろ、毎週土曜日の朝2時間でセッティングし、日曜日の夜2時間で解体撤収するわけである。どうしようかと悩んでいた。
ところがこんなとき、同時進行のまったく別のプロジェクトが偶然に繋がって、一気に問題を解決してくれることがある。
ギャラリー・間の好意で、ある建築家が展覧会で使った台を、その展覧会終了後、すべてただで譲ってもらえることになった。それがダンボールで作られた台だった。
「あー、この台はこの後どうするんですか？」
「全部、捨ててしまいます」
「あー、これ譲ってもらえませんか？」
僕らお得意のクレクレタコ战法だった。

その後さらに、譲ってもらった台をすべてバラバラにし、組み立て式のイス・テーブルにつくり直す必要があったが、その作業スペースもギャラリー・間の一部を使わせてもらうことができた。
こうした必然のような偶然の繋がりや、材料とお金と作業スペースの問題がいっしょに解決した。僕らは3日ばかりで全てのイス・テーブルを用意した。

+atdic後、ダンボール家具は古紙回収者に引き取られた。
今はまたどこかで紙になっている。もしかしたら、Dictionary (+atdicを主催するクラブキングのフリーペーパー) の1ページになっているかもしれない。

017 A-works +atdic

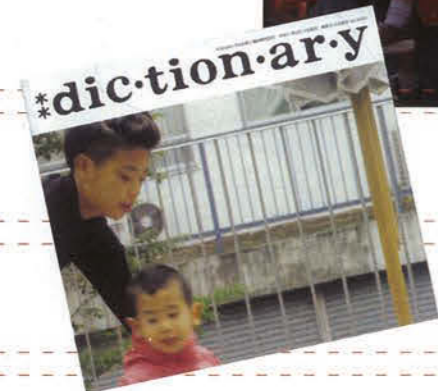
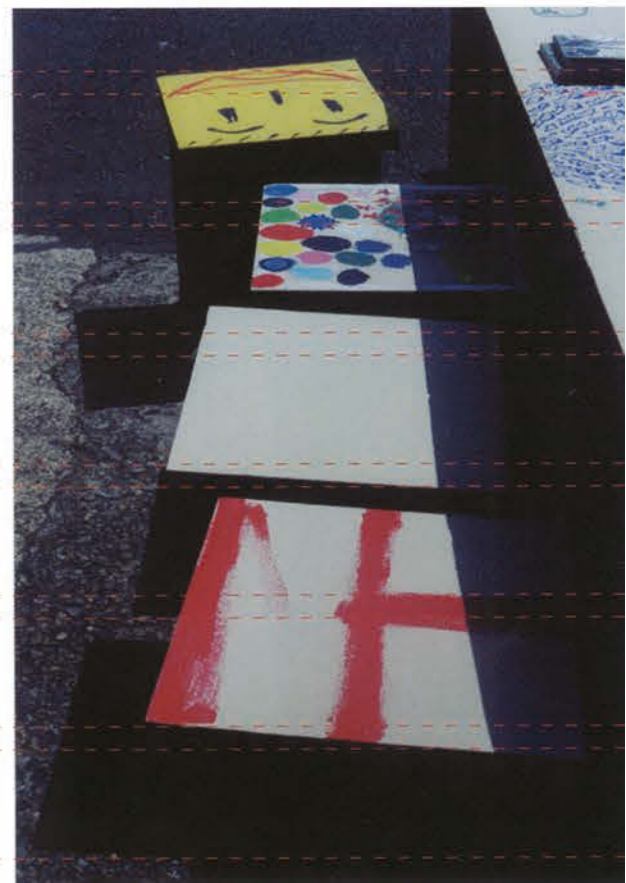
architect: arita yoshitaka, planning: A activity

+atdicは6月中の週末、渋谷に立ち現れた。倉庫に人が集まって、しゃべったり、話を聞いたり、お茶を飲んだり、食べたり、本を読んだり、絵を書いたり、音楽を聞いたり、ボーっとしたり、そんな、だらだらとまったりと時間を過ごせるいいイベントだった。

僕たちはその空間構成もさせてもらった。イベントの性格上、あまり無理せず力の抜けた、居心地のいいイージーな空間にすることを試みた。
なにしろ、場所が渋谷のスペース・エッジだったので、殆ど手を加えなくても充分イケていた。倉庫に人が集まってしゃべっている、その感覚が好きだった。



カフェ、ブック・ショップはダンボールで作ったテーブル、イスで構成した。
お料理隊のGomaは日替わりの美味しい和菓子とお茶と一緒に、それらを乗せるダンボールのトレイとコースターを手づくりで用意してくれた。参加者には家具やトレイに自由に落書きしてもらった。
+atdicの日が経つにつれ、テーブルやイスはイラストやメッセージで埋まっていき、このイベント独特の雰囲気加速させた。落書き上手の集まるイベントだった。



軽い+安い+簡単 LIGHT+CHEAP+EASY

カフェ用につくったダンボールのイスの評判が良く、
現在、バージョン・アップした丸型のイスを試作し、商品化を試みている。
軽くて、安くて、簡単に組み立てられるイス。
家具というよりは、文房具の感覚に近い。テーブルにもなる。
意匠登録出願予定。



Goma

Goma のおいしい料理

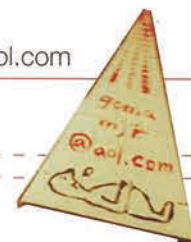
Goma のおいしい料理がつくる素敵な空間

Goma のおいしい料理がつくる素敵な空間にながれる楽しい時間

Goma のおいしい料理がつくる素敵な空間にながれる楽しい時間がうみだす偶然の出会い

出来事としての料理、
そこに生まれる出会い、
全て Goma が大切にしたいこと

Goma : 料理ユニット gomamjr@aol.com



中村政人 アート ↔ 都市 ↔ 建築

interview, text: arita yoshitaka

中村政人 nakamura masato : 1963年秋田生まれ。89年東京芸術大学大学院修士課程修了。89~92年韓国弘益大学大学院西洋学科修士課程在籍。97年ポーラ美術振興財団の助成により香港滞在。現在、ノンプロフィットアートスペース「コマンドN」代表。主な展覧会に92年「中村と村上展」(ソウル、東京、大阪)、94年「新宿少年アート」新宿歌舞伎町全域、「Lucy」SCAI THE BATH-HOUSE、白石コンテンポラリーアート、95年「Origin of Flavor」ナビンギャラリー (バンコク)、96年「Abstract/Real」20世紀美術 (ウィーン)、98年「OSC+mV」広島市現代美術館、SCAI THE BATH-HOUSE、白石コンテンポラリーアート、キリンプラザ大阪など。

中村政人のアートとのかかわり方は様々だ。彼は、くるくる回る床屋さんのパーパー・ボールや幹線道路沿いにそびえ立つマクドナルドのMサイン、深夜の街に乾いた光を放つコンビニの看板を美術館に持ち込んでアート作品にする。「ザ・ギンブラート」では、アーティストを集めゲリラ的に銀座の街にアートを仕掛け、「秋葉原TV」では秋葉原中のテレビモニターを借り切って世界のアーティスト達のビデオアートを流した。彼は同時に、都市の中でアートにかかわる者たちを柔らかに結びつけるネットワーク「commandN」を主宰する。しかし、これら全てに共通するのは、圧倒的な都市とのかかわりあいの中でそれらが生まれてきているということだ。

徹底的に観察することと柔らかな転用の発想で、都市の断片を美術館に移植し、アートの断片を都市に移植する美術家中村政人。彼は、「都市との距離」という言葉で自らのアートを説明する。

都市との距離

—僕たちにとっても「都市との距離」というのはとても興味のある問題で、例えば建築の仕事であれば、とりえずクライアントや施工者がいたり、法規をクリアしなければいけなかったりして、そこでまず一つ都市とか社会とかとのかかわりを持っていくんですけど、アートは、より自由な分、より難しいのではないのでしょうか？
中村さんのレクチャーの中では、赤瀬川さんのいうトマソンのなものを自分で都市に仕掛けていくというような作品が「都市との距離を縮める」行為の例としていくつか紹介されました。まずそのあたりからお話をうかがえるでしょうか？

アートを勉強していく過程で、対象を観察してそれをなぞるような作業をしていると、ある時点でこれって本当にアートなのかな？と疑問に思うときが来るんです。大学入ってすぐくらいのころですけど。僕の場合にも同じように、自分の中に培われてきた「アート」を含みアートを形成する制度そのものを、あるときからすごく疑う目で見だしたんですね、その時に路上観察的な視点に出会った。これでもっと楽になれるっていうのがあったんです。自分の考えが先にあって対象を見つけていく、というのではなく対象または環境にアフォードされていく自己を見つめてく作業といえます。もちろん赤瀬川さんの影響はありますし、継承していく考え方だと思います。
アートに対しての不信感みたいなものは自分の作



「No Parking」1993年 ザ・ギンブラートにて ©masato nakamura



1991年韓国ソウルにて観察された駐車禁止切り株 ©masato nakamura

品をつくるというプロセスの中で変化してきているんですけど、その信じきれないわだかまりみたいなものがずーっとあって、その気持ちが「都市との距離」という言葉を考える上で重要になってくると思うんです。
一回やったことがあるんですけども、渋谷の駅前にわざとカバンを置き去りにして、ぐるっと一周してきてまだあるかなってもどってくる。自分の大事な荷物なんだけど、すごくドキドキする。自分のプライベートなものを公共にポンと置くだけで、どれほど勇気があるものか、すごく実感できたんですよ。そのとき、自分がどんな反応をするのか気持ちを確かめてみたかった。街の中に漂う自分とそこに置かれたカバンとの関係はプライベートでありパブリックであったわけです。「アート」という枠からではなく、街から自己を認識したかったんです。その認識の実感のようなものが「距離感」と言えます。

道端にポンとものを置くという行為から、もう少し計画的に、「ザ・ギンブラート」でやったように展覧会としてパブリシティを出してものを置くようになってくる。そうすると、プライベートな意識がどのように働いて街が形成されているのかが見えてくる。つくるということを自分のためだけではないステージで捉えることができる。観察をすればするほど、都市との距離感も僕の中で変化してきて、都市の創造力のようなものにつき動かされていく自己に気付いていくんです。

—今、建築あるいは、建築という行為に興味を持っている理由は？



commandN内部
壁には「最初は一番初めは東京入居する車の中から始まった。」というcommandNの成り立ちを示す言葉を使ったアーティスト・エ・ウールズ作品が描かれている。 ©masato nakamura

葛飾に引越したのがきっかけなんです。近所のイトーヨーカドーの屋上から東京の下町の風景が見えるんですよ。波が押し寄せるように家があって、高速道路が家の頭の上をビューっと走っている。そういう風景を誰がいつどういう考えでつくり、こうなってしまったのかっていうようなことに興味を持ったんです。それでセキスイハイムのM1をつくった大野さんや工学院の吉田さん、東大の松村さんに会いに行ったり本を読んだりしました。それで「産業」として住宅が出てきたいきさつを知ったわけです。住宅は「建築」というよりは「産業」としての流れが強いんだということです。それじゃあ建築家ってどういう職業なんだろう？ということや、それに対してアート、美術はどうかわわっていきけるんだろう？というようなことを考えたかったんです。

—最近、美術館の中に建て売り住宅を建てるという作品を計画されたと聞きましたが。

実現にあと一步のところまで中止になりました。あの作品では、代表的なプレハブ構法の住宅を美術館の中であえて建てることによって、住宅という考え方が他のジャンルとどう共有できるのかということを考えてみようと思ったんです。住宅というのは個人のスキーマ形成に最も影響を与える建築であり、場所であると思うんです。だから、住宅に興味を持ち、自ずと建築にも興味を持つようになったんです。

都市のリアリティー

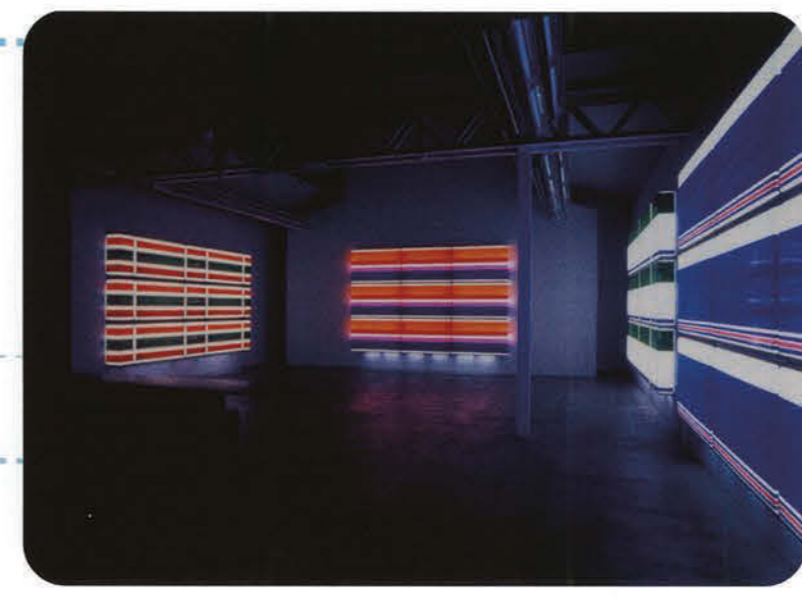
アトリエ・ワンの塚本さんたちがこのまえ言っていた話ですけども、例えばデパートがあると、その屋上が自動車教習場になってたりとか、一つの機能とされていたことがぜんぜん違う使われ方をしてしまうというようなものがありますよね。それは僕もそう思っていて、すごく共感したんです。最初の機能を勝手に逸脱して増築していってしまう。そういう面白さが都市にはありますよね。
我々は既に目の前に形が与えられていて、それに対してプラスしていかなければならない世代です。

前の建築家とか世代のやったことを全部一度きれいにして一からはじめることはもう不可能だし、逆にそういうところにリアリティーを持ってないというのが、美術をやっているもそうです。自分の作品をつくる時に例えばペインティングをしようとするとき、もう歴史が見えてしまっていて、ある種自分がそこに絵の具を置こうとすることは誰かの絵の上に絵の具を置いているような感覚がある。そのリアリティーを大切にしたいんです。なんにもないところに手を付けるんじゃなくて既に他人の手垢が付いているところに仕事をしなければならぬっていうパララッというんですかね、今の都市はそれらのものが

複雑に絡んでいるんだと思います。
—あるものが転用されたり付け加えられたりというものでき方は確かに面白いですが、でも、それを意図的にやろうとすると途端に面白くなくなるようなジレンマもあると思うんです。アートの話でいうなら、例えば都市の中にトマソンのなものを自分でつくろうとしても、本物のトマソンにはかなわないような気がするんです。ある目的で建てたはずのものがぜんぜん違うものにつかわれていたり、ビルのプロアゴなどにミスマッチな機能のものがバラバラ入っていたりするというのも、それはいろんな人



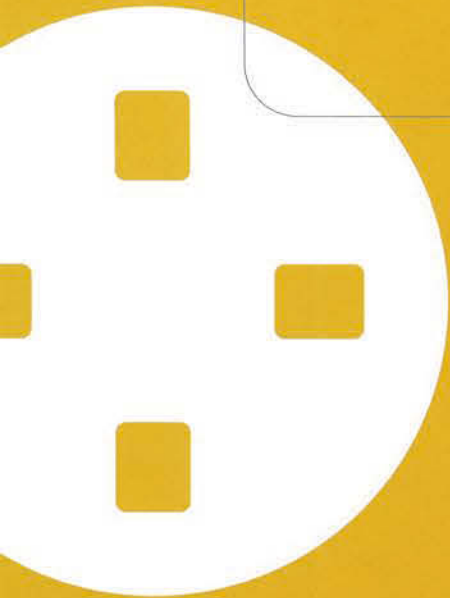
「OSC+mV」1998年 広島現代美術館個展での展示風景
協賛：日本マクドナルド(株)
協力：東亜レジン(株)、キリンビール(株) 企画協力：(株)白石コンテンポラリーアート
写真：オオシマ・スタジオ 写真提供：広島現代美術館 ©masato nakamura



「トコヤマーク」
東京 古屋ビル 1992
©masato nakamura
「TRAUMATRAUMA」SCAI THE BATHHOUSEでの個展風景
特別協賛：(株)燦英、東亜レジン(株)
協賛：(株)am/pmジャパン、朝日エティック(株)
協力：(株)セブンイレブン・ジャパン、(株)ファミリーマート、(株)ローソン、藤倉プラスチック(株)
©白石コンテンポラリーアート

OPEN

3P-chair



LIGHT + SIMPLE + EASY



¥7400



Sun Wukung is waiting for Tang Hsuantzang at

Cafe? INDIA



024 A-works Cafe? INDIA

renewal design: arita yoshitaka, baba masataka, photo: KATSU.(F.I.O)

角地にあって、高い天井と、通りに面した大きな引き違いの扉を持つその空間には、なんとなく力の抜けた心地よさのようなものがあつた。

杉並区高円寺にある、もともとカフェだったその場所の改装をした。

予算も限られていたから、とてもささやかな工事だったけれども、許される範囲内で少しずつ手を入れた。

おもてにあった、古くなったテントと看板をはずし、外壁を白く塗って簡単な看板灯を取り付けた。内部では、不要な壁をとっばらい、新しいカウンターを付け、壁と天井と床のペンキを塗り替えた。蛍光灯は全部はずして、照明を新しくした。

イスを一部新しくし、観葉植物を持ち込んで、どこかで余っていた事務所用応接セットとスチールロッカーをもらってきた。

結局、ここでは僕たちはなにも新しくはデザインしていない。

それはただ、ルーズさをコントロールする作業だった。



cafe? / 11:30-22:00
bar! / 22:00-4:00
Manuera cafe / 22:00-4:00 (Fri.&Sat.)
Monday close
URL <http://www.altoki.co.jp/cafe>



昼間は「cafe?」（「お茶しませんか?」とも「cafeってなんだ?」とも読める）のこのお店は、夜10:00～朝4:00までは「bar!」になり、週末の夜は「Manuera cafe」というクラブになる。リニューアル後、壁はギャラリーとして貸し出され、アーティストの持ち込み作品等の展示も行なわれている。カレーも美味しいし、心地よい音楽も流れているし、なんだかのんびり出来るイイ感じのところです。このお店には高円寺という街がもっている独特の雰囲気が見れているような気がします。